

キーワード：法身、大乘、仏身

仏陀観、また、「法身」(dharmakāya)ということについては、すでにこれまで多くの研究成果が発表されている。

まず「法身」は、初期仏教、部派仏教においてはふつう「法の集まり」あるいは「法を身体とする(仏)」などの意味でつかわれている。その場合の「法」とは「教説」、「真理」、「功德」などを表わす。例えば、Milindapañhāでは「すでに去ってしまわれた世尊を「ここにおられる」「あそこにおられる」というように示すことはできない。しかし大王よ、世尊を法身によって示すことはできる。なぜならば大王よ、法は世尊によって示されたからである。」と、法身が「教説の集まり」の意味で語られている。¹

しかし、大乘仏教において「実体的、宇宙的存在としての仏」という仏陀観がみられることを前提として、早い時代からその「法身」に実体的な意味を見ようとする傾向があるという指摘もなされている。そこでは、法身を実体的にとらえる仕方とは違って、初期仏教から大乘(主に般若経系経典など)に至るまで法身は「法の集まり」「法を身体とする(仏)」という意味で一貫しているとし、実体的な仏と捉える余地はないという。² 例えば『八千頌般若経』では「ブツダ・世尊たちは法を身体としているのである、と考えて、教えに対して愛情と尊敬をもって正しい教えを習得するのだ。」と、また、『金剛般若経』では「私を色や形によって見る者、私を声によって理解する者、彼らは誤った努力をなす者であり、私を見る者ではない。諸仏は法として見るべきであり導師は法を身体とするものとして見るべきである。」と、ここに実体的仏が説かれているわけではない。³

ある研究では、『八千頌般若経』における法身に「経典の集合」の意味を認めながらも、「過去・現在・未来の無数の諸仏を生み出す根源としての唯一の仏身の存在を模索するようになった。仏陀観は、諸仏に共通する本性の追求から諸仏の根源の探究に転換したのである。いいかえれば、それは無数の諸仏を統一する原理としての仏身の究明であった。このような傾向は初期大乘の代表的経典である『八千頌般若経』や『法華経』において始まる」という。⁴ 初期大乘において法身が諸仏に共通の本性から「諸仏の根源」へ転換したと述べられているが、そのようにとらえ得るかには疑問の余地がある。

以上のような動向を踏まえて、諸仏に共通の本性としての法身が仏陀観の発展とともに諸仏の根源または実体的仏へ意味転換したのであろうという点に留意して考察する。

¹ 新田智道「パーリおよび有部文献における「法身」の語義について」、『仏教研究』(国際仏教教会 浜松)32号, 2004. 3

² Paul Harrison, "Is the Dharma-kāya the Real "Phantom Body" of the Buddha?" *JABS*, 15-1, pp.44-94

³ 和訳は、下田正弘『涅槃経の研究』春秋社 1997, pp.574-575 に依った。

⁴ 梶山雄一「仏陀観の発展」、『佛教大学総合研究所紀要』第3号, 1996